

考古学からみた戦国期城下町の原型

前川 要

I. はじめに

- (1) 研究史と目的
- (2) 理論的前提

II. 中世後期集落の類型的把握

- (1) 中世集落の三つの指向性
- (2) 類型の年代とその地域差

III. 短冊形地割の検討と2つの類型

IV. 考察

- (1) 一乗谷型成立の歴史的背景
- (2) 東国における宿の研究
- (3) 堆肥利用と都市・農村の関係

V. 結語—戦国期城下町二元論の再評価

I. はじめに

(1) 研究史と目的

近年中世遺跡の考古学的調査がかなり進んできている。勿論、京都や鎌倉のような市街地の再開発に伴う都市遺跡の調査も多いが、とりわけ興味深いのが福井県一乗谷朝倉氏遺跡や広島県草戸千軒町遺跡のような都市遺跡と、地方における村落の様相がかなり判明してきていることである。

中世都市の研究は、現在、文献史学、歴史地理学、建築史学、考古学など学際的に行なわれている。本報告においては、方法論的には、考古学的発掘成果を主として用いるが、大半の発掘成果はあくまでも点的であり、都市空間を把握することはほとんど難しい。それゆえ、発掘成果の位置付けをするために、絵図や地籍図などの歴史地理学的資料も援用

する。

戦国期城下町の研究としては、1960年代から先んじて歴史地理学で論じられた。松本豊寿¹⁾、小林健太郎²⁾、矢守一彦³⁾などの研究が重要である。1980年代から文献史学でも論じられ、小島道裕⁴⁾、市村高男⁵⁾等の研究が挙げられる。

松本豊寿の示した課題は、土佐の事例から、都市域構造論と領域における城下町の中心地機能の解明であった。特に、本報告との関わりでは、前者のうち初期城下町の構成要素を分析し、原城下町といった概念を示した。また、小林健太郎は、松本の研究では不十分であった城下町景観の復原を行い、それをもとに中心地論的観点から、戦国大名領国の地域構造の解明を目指した。矢守一彦は、系譜的には給人屋敷と地方市町にそれぞれつながる給人居住部分域と商工市場部分域とが未だ空間的にも機能的にもルーズな形で併存しているとしている。

小島道裕は、戦国期城下町を、大名のイエ支配、つまり主従制が貫徹する空間と、それとの対比で公界＝平和領域たる非主従制的空間である市場空間とに二元的に把握できるとした。市村高男は関東の事例から小島を批判して、戦国期城下町は城郭とそれに付随する家臣集落、複数の宿・町・市などの町場集落、複数の寺社やそれに付随する門前集落、などをルースに統合した多元的構成をとり、それらの構成要素が分布する広い範囲を都市領域としていたとした。

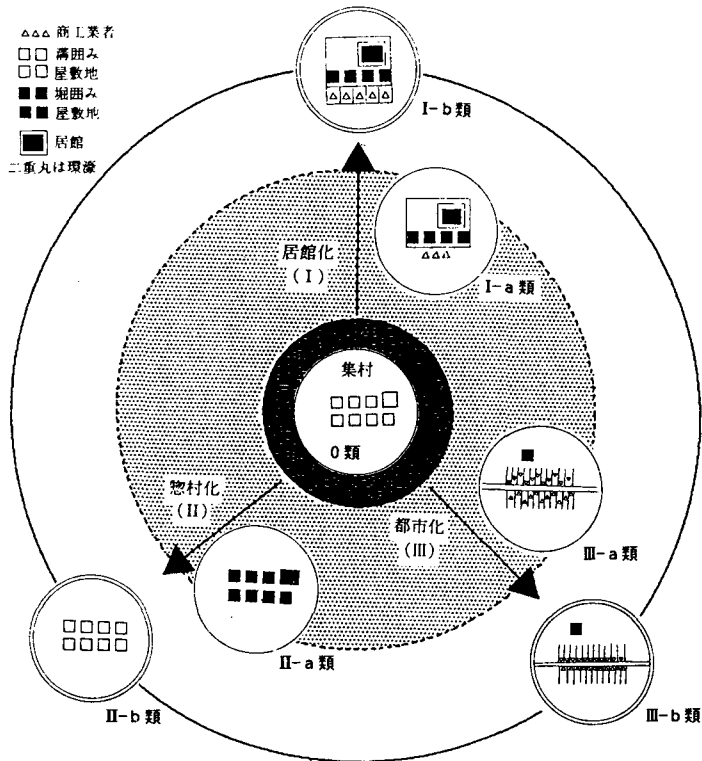


図1 中世後期集落類型概念図

表1 中世後期集落類型概要表

類型	類型内容
0類	堀囲みで方形の屋敷地が連続して構成される。その中で、やや階層の高い屋敷地が存在する。
I類	a 堀囲みで規模的に卓越した居館を中心に、周辺に小さな屋敷地が配置される。屋敷地内外に商工業者が存在する。
	b I-a類をさらに環濠で取り囲み、商工業者の凝集が顕著で、短冊形地割を有するものもある。
II類	a 堀囲みで方形の屋敷地が連続して構成される。その中で、やや階層の高い屋敷地が存在する。
	b II-a類をさらに環濠で取り囲む。
III類	a 道路に沿って短冊形地割が存在する。地割内の建物の面が揃わない。裏地に方形に区画された宗教施設や大きな屋敷地が存在する。
	b III-a類をさらに環濠で取り囲む。地割内の建物の面が揃う。

表2 中世後期集落地域別類型表

地域 類型	地域	
	畿内およびその近国	畿外
I類	a 日置荘Ⅱ区 Eトレンチ	江馬氏城館 ⅡA期
	b 高屋城	一乗谷朝倉氏
II類	a 横江	なし
	b 十六面・薬王寺	なし
III類	a 妙楽寺	草戸千軒町Ⅱ期 後半
	b 堺環濠都市	なし

(前川 1997)

それらに対して、近年、都市史研究会がシンポジウムを開催した。その中で吉田伸之は、近江国甲賀郡山中氏屋敷図や上野国新田郡上今居郷屋敷絵図などから見て、領主の屋敷を城郭に、被官屋敷の部分の家臣団屋敷に、周

辺百姓の屋敷を町人地にそれぞれあてはめ、城下町の原型を小領主クラスの屋敷の空間構成に考えた⁶⁾。

筆者は以前、中世後期集落の類型化を行い、居館化、惣村化、都市化の3つの方向性を示

し、その中で地方都市における短冊形地割の成立と展開を素描した⁷⁾(図1, 表1・2)。

従来の研究では、中世前期集落が消滅したのち、中世後期の一般集落が発掘調査であまり検出されないのは、14世紀から15世紀前後に、中世前期型集落が廃絶・再編されて、現在の集落の下に移動し、発掘調査の機会が少ないためであるとされている⁸⁾。勿論そうした集落も存在するが、前稿では、それ以外の集落を発掘調査成果中心に検討し、中世後期集落の方向性を提示した。そして、その中では、戦国期城下町の基本的構造が、I類の方向性の中で看取されることを論じて、特にI-a類の中で見られることを示唆した。次のII章では、前稿(1997年)の要旨を示しておきたい。

以上の研究史を踏まえて、この報告では、中世の地域社会において、いかに都市性(都市的要素)⁹⁾が成立してくるか、前半では中世後期集落の類型化、後半では集落において最も都市的遺構とされる、短冊形地割に着目して、戦国期城下町というものがどのように成立してくるかを検討することを目的とする。

(2) 理論的前提

ここで、何故短冊形地割に着目するか、そして、戦国期城下町の空間構造の理論的前提を示して本稿の立場を明確にしておく。

まず、都市論の分析視角としてもっとも重要なのは分業論である。ここで著名なマルクス・エンゲルスの『ドイツ・イデオロギー』¹⁰⁾に示される都市理論を見ると、「ある民族内部の分裂は、まず農耕労働からの工業および商業労働の分離、またそれによって都市と農村との分離、および両者の利害対立をもたらす。分業のいっそうの発展は、商業労働と工業労働との分離へと進む」とされており、農耕労働と工商業労働との分離が、農村と都市との分離を示す重要な指標とされてきた。

この点からすれば、「工村」¹¹⁾とも言うべき、村落の中になんか手工業者が凝集する中

世前期の段階から、定住専門化を示す短冊形地割の成立こそが、都市成立の十分条件と考えられる。

次に、戦国期城下町二元論は、まさしくマックス・ウェーバーの『都市の類型学』¹²⁾に示される。それは、都市を経済的に定義した場合、「荘園領主や君侯のオイコス」と「市場」という2つの経済的中心点を併有していることとされている。これについては、のちに再論する。

II. 中世後期集落の類型的把握

(1) 中世集落の三つの指向性

古代末から中世前期の集落(10世紀から13ないし14世紀)が、広瀬和雄の指摘するように散村という形態であれば、中世後期集落(14世紀から16世紀)は集村という言葉で表現される¹³⁾。

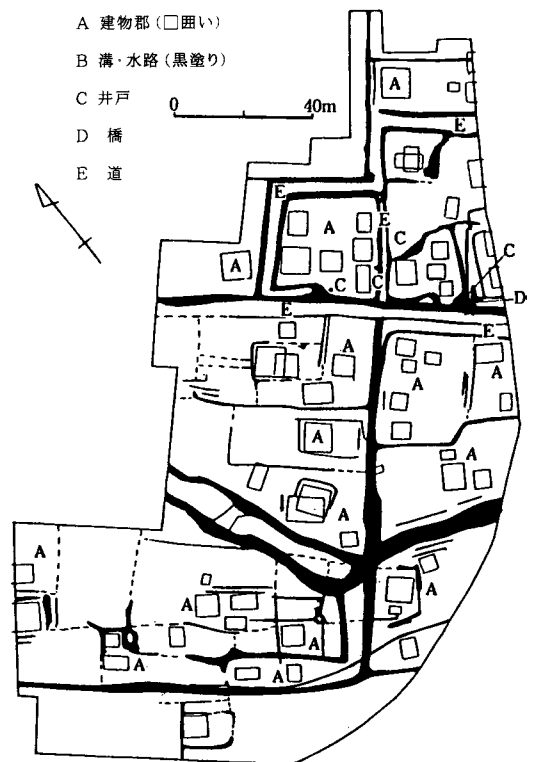


図2 西田井遺跡遺構平面図(註14)③)

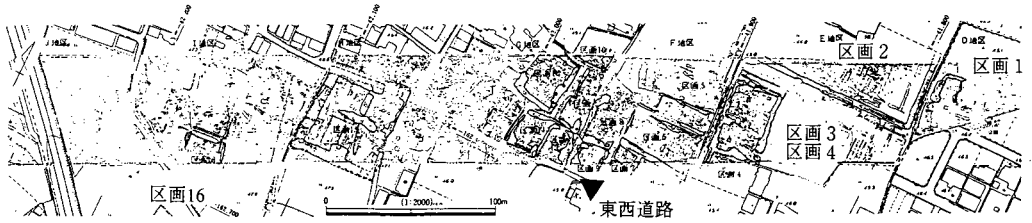


図3 日置荘遺跡II調査区区画配置図(註15)①に加筆

図1の中心に掲げた集村=0類のありかたは、滋賀県西田井遺跡¹⁴⁾を指標とする(図2)。ここは、12世紀末から14世紀初頭まで、継続して集落が形成され、13世紀代にその中心がある。集落は条里に合わせて引かれた溝によって一町四方に土地区画されて、その区画の中をさらに浅い溝で区切り、ひとつひとつの住居域を不完全な形ではあるが仕切っている。長方形のブロックを基本としており、それが18箇所確認されている。それぞれのブロックの中には、掘立柱建物が2棟から5棟程度検出されている。調査区の北側には、一辺約30m四方を測る、他より大きな屋敷地が

発見されており、唯一井戸がここでのみ検出されている。空間構成としては、ほぼ均質な屋敷群の中にやや階層の高い屋敷が見られることが挙げられる。

いくつかの集落は、近世以降、近現代に引き続く現在の集落の下に移動するが、それ以外のものは、大きく三つの指向性が見られる(図1)。さらに、最も外側は、いずれも堀と土塁で、集落内部を防御するという点で共通している。

まず、居館化である。I類と呼称する。大きくI-a類とI-b類とに分類される。I-a類は、大阪府日置荘遺跡¹⁵⁾における西の村の館周

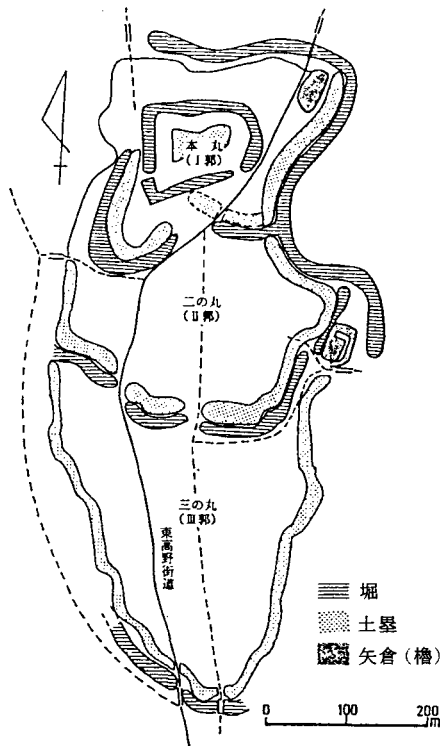


図4 高屋城遺構概略図(註16)②より

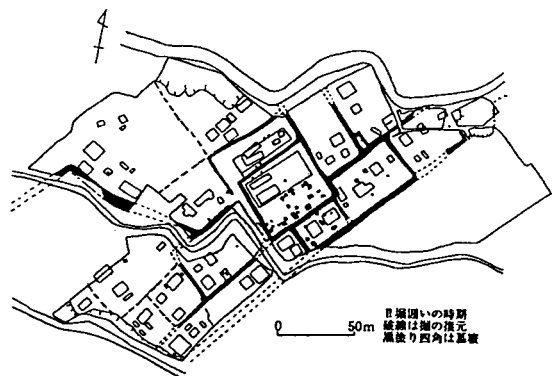


図5 横江遺跡遺構平面図(註14)③より

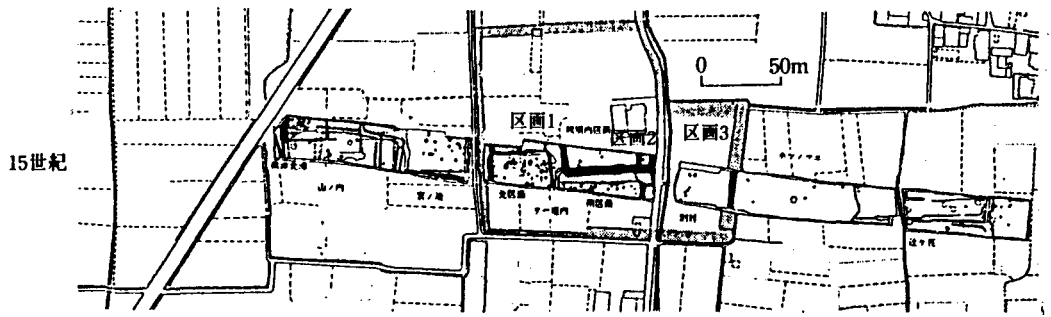


図6 十六面・薬王寺遺跡遺構平面図(註18)より

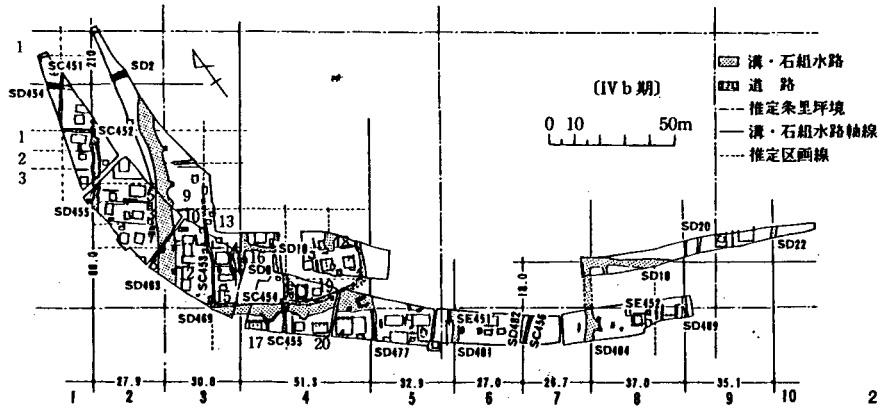
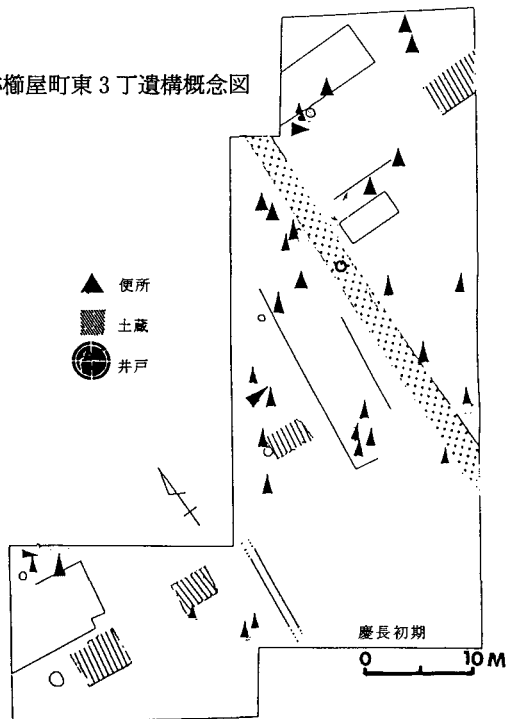


図7 妙薬寺遺跡遺構平面図(註19)②より

図8 堺環濠都市遺跡櫛屋町東3丁遺構概念図(註20)③より



辺における空間構成が挙げられる(図3)。ここでは、13世紀後半頃緩やかに結合した5から7箇所 の塊村が再編成されて、ほぼ一町四方の館で幅3~6mの堀の内側に土塁が存在したと想定されている。その外側には、600坪の屋敷地が2ヶ所、さらにその西の外側からは、180坪程度の屋敷地が検出されている。周辺には、鑄造工人が存在したことが想定されている。I-b類には、大阪府高屋城¹⁶⁾が挙げられる(図4)。主郭を中心として、第2郭、第3郭と求心的に展開し、発掘調査の成果から、主郭では、古墳の西南部に隣接して、多くの茶器片や庭園の遺構が検出され、茶室が存在したことが想定される。第2郭は、城主をはじめ上級家臣の屋敷地であったと考えられる。第3郭は、礎石も小さく、遺構や遺物に際立ったものが見出せないことから、下級家臣や商工業者の居住区とされている。土塁と堀、大規模な櫓台の遺構の成立年代については、若干検討の余地は残されているものの、15世紀末から16世紀初頭に建設されたものと想定されている。短冊形地割については、不明であるが、福井県一乗谷朝倉氏遺跡の事例から類推すれば、商工業者がその中に存在したと推定してもよからう。

次に、惣村化である。II類と呼称する。大きく環濠で集落を取り囲み若干の階層性は見られるものの、むしろ均質化の方向性が挙げられる。大きくII-a類とII-b類とに分類される。II-a類は、滋賀県横江遺跡¹⁷⁾のII期が挙げられる(図5)。ここでは、2時期の遺構が検出されている。

I期は、11世紀末から13世紀後半に続くもので、浅い仕切り溝によって区切られた長方形の屋敷地が集合して集落を構成するもので、0類中世前期型の集村形態であったものが、II期の13世紀後半には、I期の屋敷の位置関係を踏襲しながら溝を掘り直して堀を深くしている。中央の屋敷地は、一辺約40m四方のやや広い空間を占め、敷地の南東部に土抗墓を多数もっている。他の屋敷地は、約20m×約40mの長方形を基本としている。木戸雅寿は、この遺跡におけるI期からII期への変化

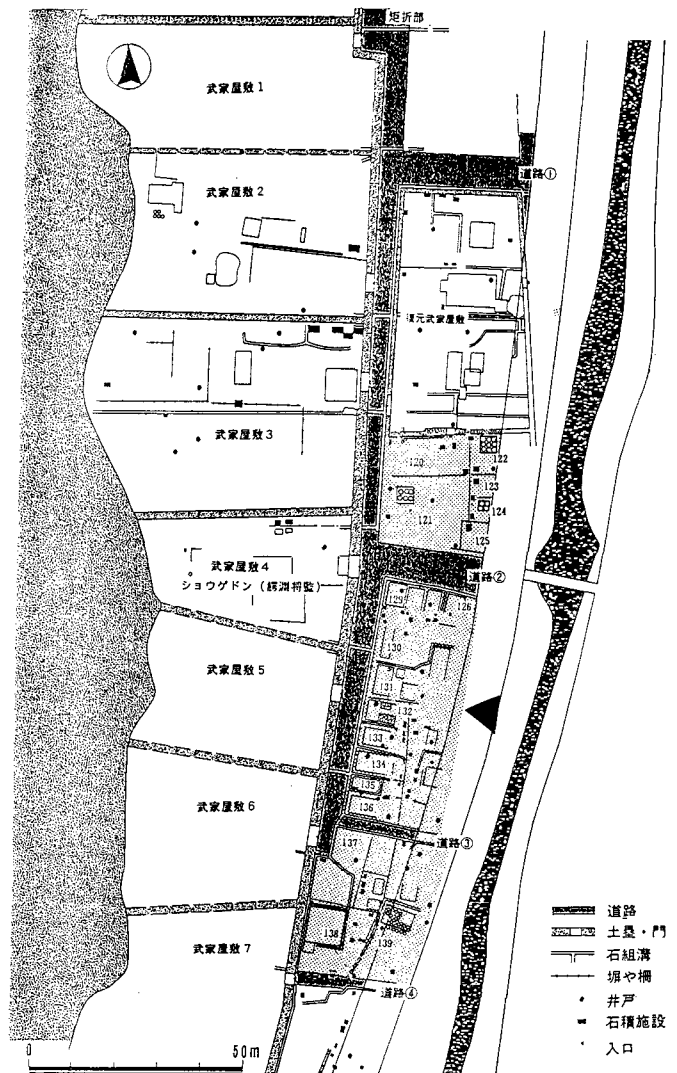


図9 一乗谷朝倉氏遺跡平井地区平面図 (註22) ②に加筆

代には見られるが、より早く存在していた可能性が高い。

(b) 畿外

I-a類は、岐阜県江馬氏館²¹⁾II A期を指標とし14世紀末から15世紀初頭。I-b類は、福井県一乗谷朝倉氏遺跡²²⁾を指標とし15世紀末から16世紀前半(図9)。II-a類とII-b類は、畿外では存在しない。III-a類は、広島県草戸千軒町遺跡²³⁾のII期後半を指標とし、14世紀代(図10)。III-b類は、現段階においては、畿内以外では、発見されていない。

なお、これらの類型の年代は、上限を示しており、おおよその年代を示したのみである。また、この類型は、発展段階を示すものではなく、必ずb類型まで到達するとは限らな

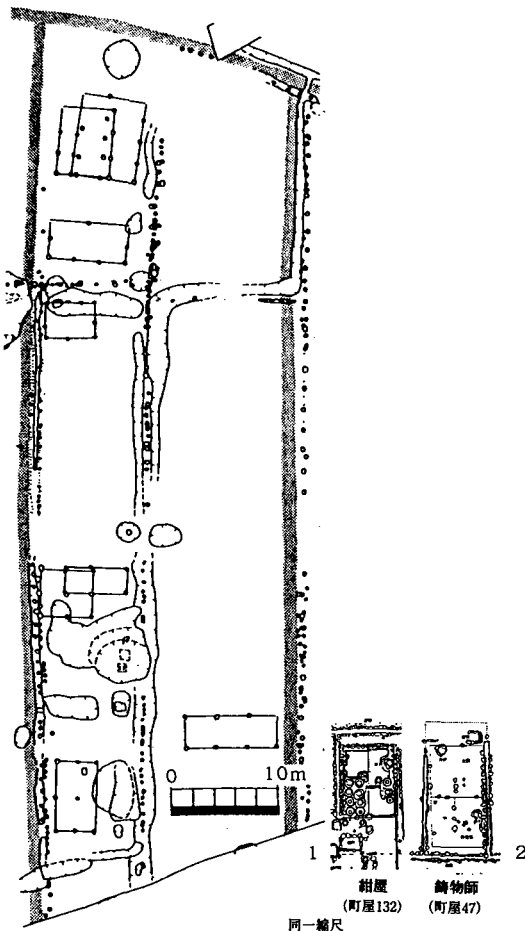


図11 草戸型(1)と一乗谷型(2)模式図
(註23) ①より, 2は註22) ②より)

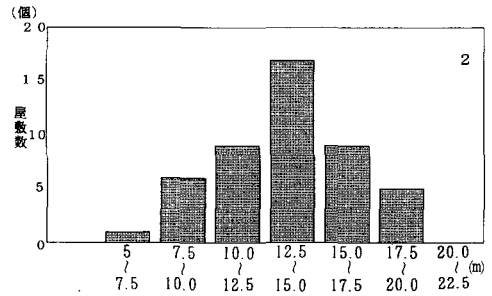
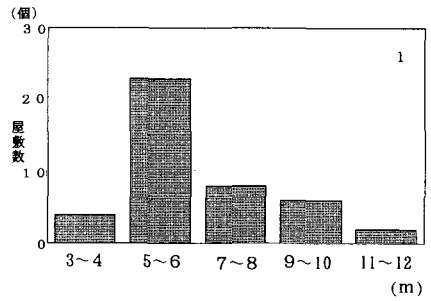


図12 一乗谷朝倉氏遺跡短冊形地割奥行間口規模分布図 (間口1, 奥行2)

い。a類型までで止ってしまうものもあり、さらには、0類に止まるものも存在する。

また、類型化の変遷は、以下の遺跡で追検証可能である。0類からI-a類は日置荘遺跡、0類からII-a類は横江遺跡、II-a類からII-b類は十六面・薬王寺遺跡、0類からIII-a類は、後述するように草戸千軒町遺跡や妙楽寺遺跡、でそれぞれ確認される。

III. 短冊形地割の検討と2つの類型

1998年の前稿で示したが短冊形地割には大きく見て2類型存在することが判る。一つは、I類型の居館化の方向性から出現するもので、一乗谷朝倉氏遺跡における赤淵・奥間野・吉野本地区に代表される地割である。つまり、間口が小さいが奥行があまり長くない類型である(以下、一乗谷型と呼称する)。もう一つは、III類型の都市化の方向性から出現するもので、草戸千軒町遺跡におけるII期後半のありかたに代表される。つまり、間口が小さく奥行もかなり長い類型である(以下、草戸型と呼称する)(図11)。

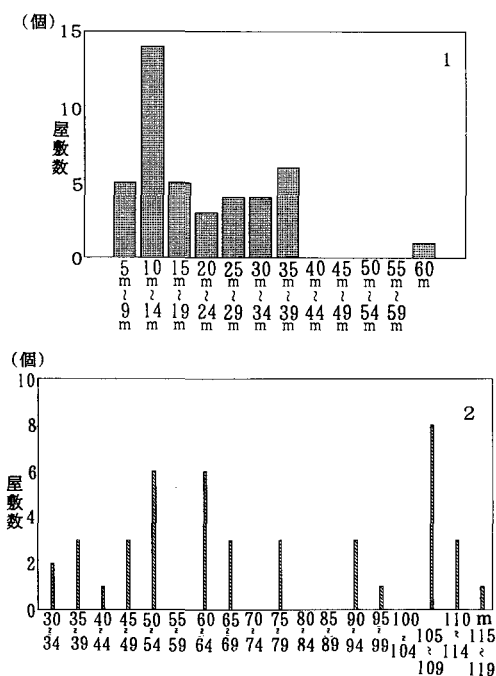


図13 草戸千軒町遺跡II期後半短冊形地割奥行間口規模分布図(間口1, 奥行2)

次に、さらに詳細に計量的に分析をすれば、一乗谷型は、間口の大きさが6m前後、奥行の大きさが12, 13m前後にピークがあるのに対して、草戸型は、間口の大きさが10~12m前後と38m前後とに、奥行の大きさが50~60m前後と100~120m前後にピークがあることが判明する(図12・13)。

一乗谷型の屋敷割り内部の典型的なものの構造を見れば、土間と床張りの部分とがあり、近世京都系町屋に見られる「通り庭」的な土間が表から裏へ通っていることが多い。便所と想定される石組枡が屋敷裏に設置される。いずれも、住居としての必要最低限の機能である建物、水、火、便所を各戸ごとに完備している²⁴⁾。

草戸型の上記に示す2つのピークを報告書では、短冊形区画の2形態として(1)形態と(2)形態の2分類している²⁵⁾。屋敷割りの中の構造がここで判る。(1)形態は、間口が10~25m前後、奥行50~60m前後の区画で、中心区画の周囲にあり、掘立柱建物、井戸、土壌の組合

わせを確認している。一般的には、問・馬借・車借などの水運・陸運関係、土倉などの金融、津の商人宿、保管・卸売業者などで、さらに鍛冶・細工などの職人等も想定できる。(2)形態は、間口が8.5~15.5m、奥行が18m以上~130m程度のもので、中心区画の南に展開する。区画施設は、最初が土壌・池・溝であったが、最終段階は、柵になっている。掘立柱建物、井戸、池、土壌などの組合わせを確認している。全ての区画に井戸が存在する訳ではなく、井戸の無い区画のほうが多い。1区画が1屋敷地ではなく、複数の屋敷地が存在する。通路が8ヶ所確認される。この形態の区画は、整地や井戸の所有関係から1区画で完結するのではなく、接した2~3区画が緊密な関係にあるとされている。(1)(2)の区画内には、居住していたことが明らかで、(1)はI期後半からII期にかけて、III・IV期は分布密度が落ちる。(2)はII期後半にのみ存在する。その性格の差は、不明としている。ここでは、西側の調査区域外の南北に道路が想定されているが、それに面して建物が面を揃えていたか否かは、不明である。(1)(2)のいずれも、草戸型として大きく括っておきたい。

IV. 考 察

(1) 一乗谷型成立の歴史的背景

ここでは、一乗谷型短冊形地割が出現してくる歴史的背景と東国におけるその地域性について考察し、さらに、今回のシンポジウム都市・村落論にそった形で、便所遺構からみた都市と村落の関係の成立について若干ふれる。

まず、一乗谷型短冊形地割は、集落の階層的なありかたのなか、一乗谷朝倉氏遺跡の屋敷地の面積分布で示したように、特に屋敷地の階層性が明確になる中から出現してくることが推定される。ヒエラルヒッシュな階層性は、II類にも若干は見られるが、特に居館化I類の方向性の中でより顕著である。

ここで、興味深いのが、京都土御門四丁町

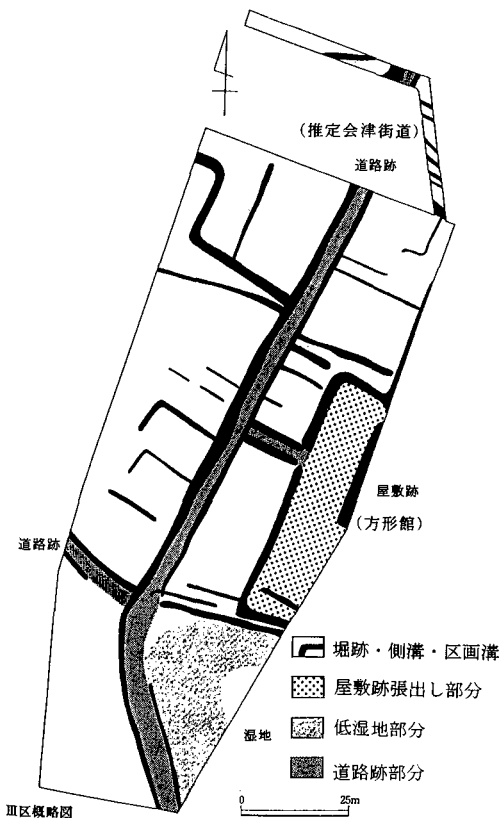


図14 荒井猫田遺跡遺構概略図(註27)より)

において室町幕府が奉公衆に、官職そのほかによる基準に則して屋敷地を階層別与えた康正2年～3年(1456から1457年)にかけての屋敷地開発事業の事例である。それによると、1/4町、1/8町、1/16町ということであり、それや他の事例から高橋康夫は、敷地配分の標準を、三管領—1町四方、四職—1/2町以上、奉公衆(上位)—1/2町以上、奉公衆(中位)・奉行人—1/4～1/8町、奉公衆(下位)—1/8～1/16町としている²⁶⁾。

I-a類の短冊形地割の成立について、何を契機としているのかという点であるが、東国の事例で近年注目されている興味深い遺跡がある。それは、福島県荒井猫田遺跡²⁷⁾という遺跡である(図14)。ここでは、側溝をもった道路に面して、推定間口が6～10m、奥行が井戸の配置により推定20～25mを測る短冊形地割が検出され、そのうちいくつかから、椀型滓

を含む鍛冶滓と羽口が出土しており、鍛冶職人が凝集して存在し、道路に面したところで、店を構えるという景観が復元できる。都市的遺構といわれる方形竪穴建物は数基のみ検出されている。年代は、12世紀後半～15世紀初頭で15世紀末には消滅しており、13・14世紀に最盛期がある。南北に推定会津街道が通る。興味深い点は、街道に沿って一辺約60mを測る方形館が造られていることである。道路側溝と堀跡の形状が酷似していることから、物流・鉄生産流通・交通を支配していた領主が居館と道路を一元的に設定し、一乗谷型短冊形地割を配置したことが窺われる。但し、居館の出土遺物には、かわらけが非常に少なく儀礼があまり多く行われていないことが想定されることから、在地領主の本城的な役割ないしは、戦国期の市町に見られる市奉行のような管理の役割を果たした可能性も考えたい。

筆者は、14世紀代から15世紀初頭における、中世後期集落分類0類からI-a類への変化の歴史的背景は、畿内以外では、室町期の各地における平地方形館を呈する守護所を中心とした守護領国体制の成立と呼応していると想定している。つまり、筆者が以前想定した守護所周辺に大型居館が散在する類型つまり高知県田村遺跡²⁸⁾(図15)を指標として提唱した「田村型」や岐阜県枝広館²⁹⁾周辺のありかたは、I-a類に近似しており、さらに戦国期城下町は、I-b類と見られる。田村遺跡群は、守護細川氏が京都退転ののち、在地領主入交氏が田村城に入って経営したとされるが、明瞭に4つの階層分化が見られる(図16)。これを見れば、屋敷群が3～4で構成され、ほぼ小さいものからおおよそ2倍程度に大きくなっていることが判明する。これは、先述した京都における室町幕府からの屋敷地付与体系と同様であり、かなり短冊形地割に近い形状を呈している。しかしながら、一乗谷型短冊形地割は看取できない。

I-a類からI-b類への変化は、畿内では、

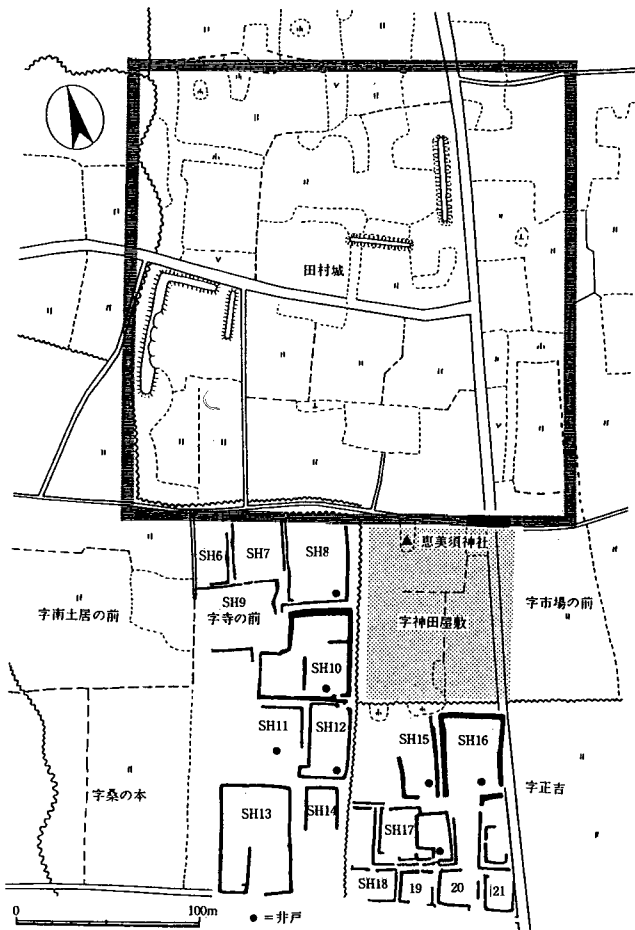


図15 田村遺跡群屋敷地模式図(註28)より)

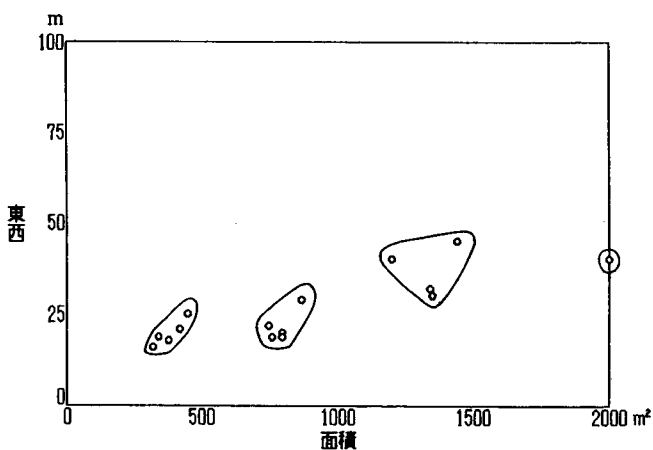


図16 田村遺跡群屋敷地面積分布図

15世紀末頃に見られるが、畿外では、普遍的に戦国期城下町が成立してくる16世紀第2四半期頃に見られる。さらに遅い場合では、新潟県町田城下のような中小城館に付属する一乗谷型短冊形地割で16世紀半ば以降頃の事例も見られる³⁰⁾。この時期差は、権力の地域差と階級分化の程度、さらには街道に隣接しているか否かの商業の利便さによっていると考えたい。以前、遺跡・遺構などの考古学的資料から見た場合、14世紀末頃、畿内を含む西国各地において室町幕府守護体制³¹⁾のもとで、各国において方一町あるいは方二町の平地方形館を基本とした、いわば「方形館体制」が成立し、15世紀末頃守護の在京制度が解体するとともに、守護館を再編強化して、居館の在地における存在傾向が顕著になると論じたことがある³²⁾。このように理解すれば、0類からI-a類への変化は、その体制が成立した時期におおよそ呼応したものと考えられる。

もし、室町幕府守護体制下で、地方にも守護所を中心とした「方形館体制」が存在したならば、京都土御門四丁町の事例で高橋康夫によって提示されたように、国人領主や土豪層の下の人・所従層、さらには居館内に存在した商工業者が析出してこれらの階層にも階層別に屋敷地が付与されたとなれば、一乗谷型短冊形地割の成立は、筆者のいうI類=居館化の方向性、I-aないしはb類の段階において、階層性の底辺で生じた現象と理解できる。また、以前論じたように鎌倉今小路西遺跡³³⁾と岐阜江

馬氏館³⁴⁾周辺の空間構造の類似性は、I類の方向性が本源的に鎌倉さらには東国社会に規定されることを示しており、それが、京都で編成されたのち、室町幕府守護体制＝「方形館体制」とともに、全国に拡散していったと理解できる³⁵⁾。全国でも屈指の中世港湾都市とされ、近年急速に調査が進んでいる青森県十三湊遺跡においても、15世紀前半代に盛行し15世紀半ばには消滅する、中軸街路両側に一乗谷型短冊形地割をもった都市計画が見られる³⁶⁾ (図17)。土塁と堀で区画する内側からは、一町四方の推定安藤氏居館とその周辺に家臣団屋敷が検出されており、これら都市全体を位置付けするならば、III類の方向性ではなく、むしろI-a類に相当し、「方形館体制」が東北北部にまで及んだ事例と評価できる³⁷⁾。

室町幕府守護体制と集落の都市化について、今谷 明は、畿内近国の守護所・郡代役所の事例から、大半が門前町や港町などの中世都市

類型を包括しており、都市としての存立の契機が守護権力による町・城郭の設定という面にある事実を強調している³⁸⁾。本稿では、この指摘を念頭におきつつ、一乗谷型短冊形地割の成立は、古代や中世前期から都城や中世都市京都などで一部に存在したのち、14世紀末から15世紀前半頃の「方形館体制」の政治支配機構成立を契機とし、中世都市鎌倉で醸成された生活様式が中世都市京都でいったん再編整備されたのち、地方都市に波及していった結果と評価したい。

(2) 東国における宿について

ここで、東国における宿を見てみたい。16世紀半ば頃までの中世東国の宿は、大きく2つに分類され、一つは、城郭や城館、或は寺院の階層的編成と直接的に関連性のあるものであり、もう一つは、直接的にそれらと関連性のないものである。

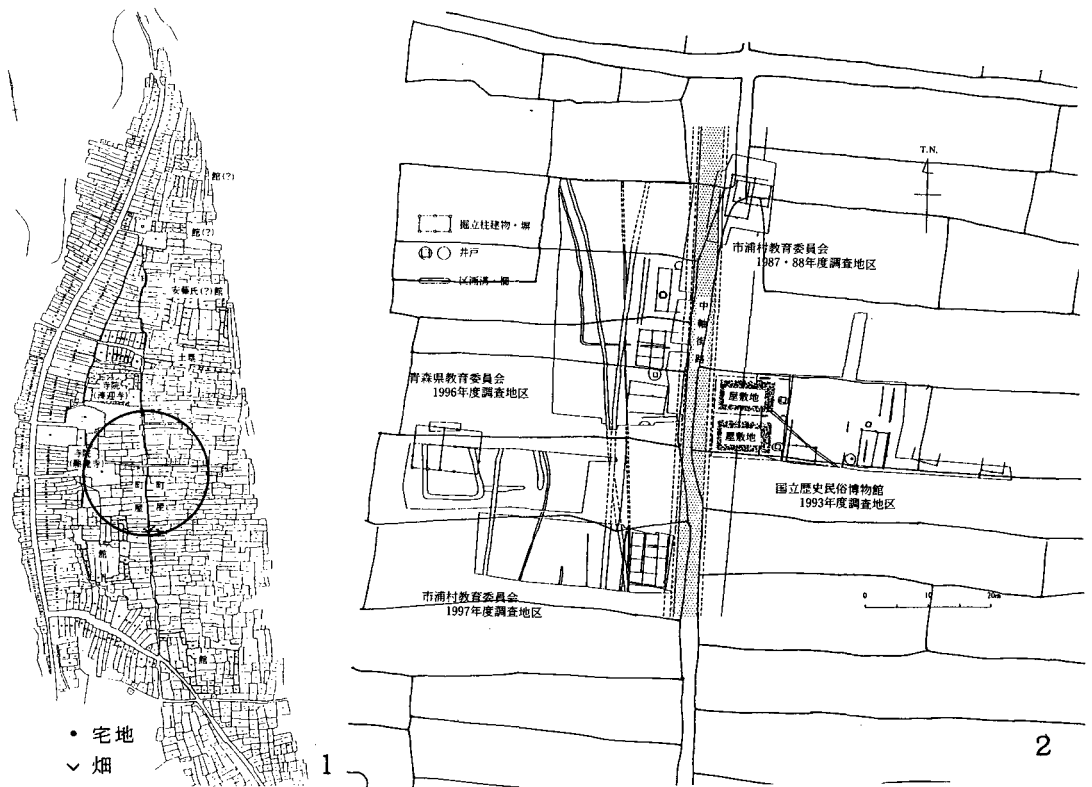
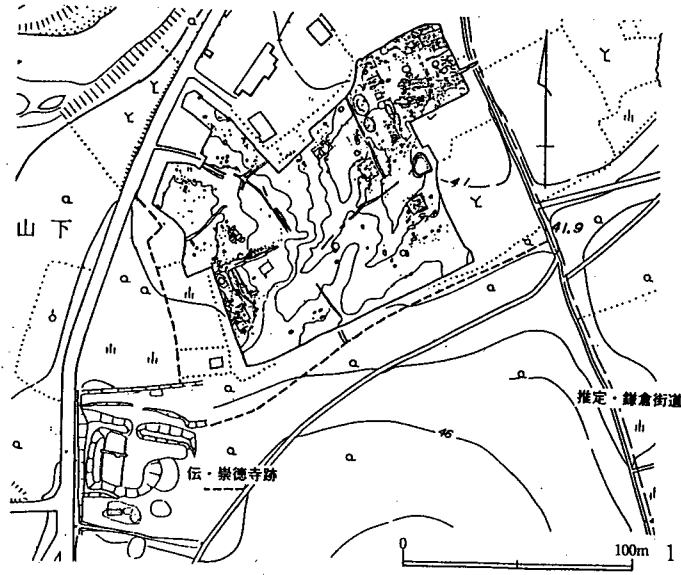


図17 十三湊遺跡地籍図(1)と遺構平面図との照合(2) (註36) に加筆)



15世紀後半
～16世紀初頭

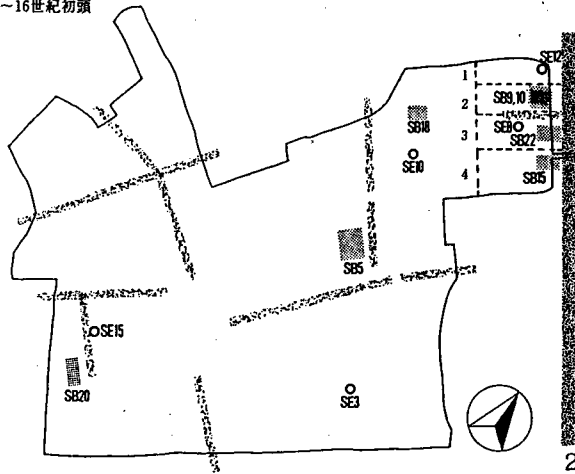


図18 堂山下遺跡平面図および概略図（註39）より
（宮瀧他1991に加筆）

寺院と直接的に関連性のあるものの一つとして、埼玉県堂山下遺跡³⁹⁾が挙げられる(図18)。ここは、鎌倉街道沿いに発達した14世紀から16世紀初頭の集落で、苦林宿と報告書では想定されているが、伝崇徳寺を居館とする周辺に屋敷群をもち、街道沿いに一乗谷型短冊形地割を示す数棟の建物をもつものと考えたい。なお、ここでは集落を囲む環濠や方形竪穴建物は全く検出されていない。また、銅細工職人が使用したと想定される「けがき針」

が街道に最も近い井戸から出土しており、銅細工職人が存在したことが判明するが、街道より奥まった地区から出土する遺物の組成は一般村落のそれとほぼ同様と考えられる。これと同様の空間構造をもつものとしては、14世紀代に成立した「尾張国富田荘絵図」に描かれた著名な萱津宿の例が挙げられる。大きく見て4つのブロックが間隔をおいて並ぶが、それぞれに北から円聖寺、千手寺、光明寺、大御(師)堂が位置し、それぞれが、2層ないし

3層に分割されている⁴⁰⁾。

次に、城郭や城館、或は寺院の階層的編成と直接的に関連のないものとして、先述した下古館遺跡⁴¹⁾、古宿遺跡⁴²⁾などが挙げられるが、年代は14世紀から15世紀と比定され、いずれも草戸型短冊形地割が想定され、堀ないし堀と土塁によって集落全体を圍繞し、都市的遺構と言われる方形竪穴建物が多数検出される。

二つの類型の系譜を考察する上で、興味深いのが伊藤 毅の宿二類型論⁴³⁾である。これは、伊藤の持論である中世空間の類型「境内」と「町」を念頭においたものであり、中世の宿を領主館に付属する宿衛・宿直的な場(「武家地」系宿)と中世町場としての宿(「町」系)とに分類している。伊藤の類型から見れば、堂山下遺跡は「武家地」系宿、下古館遺跡は「町」系宿ということになり、一乗谷型短冊形地割は「武家地」系宿、草戸型短冊形地割は「町」系宿で多く見られると理解できる。市村高男によると、東国の戦国期に多く見られる内宿は根子屋からの発展形態として「武家地」系宿に、そして外宿は「町」系宿に相当する⁴⁴⁾。未だ、発掘調査事例については多くはないが、内宿は一乗谷型、外宿は草戸型が検出されることが予想される。さらに、興味深い事実は、一乗谷型短冊形地割には、荒井猫田遺跡に見られるように都市的遺構とされる方形竪穴建物が極めて少ないのに対して、逆に草戸型短冊形地割には、下古館遺跡に見られるようにそれが顕著に検出されることである⁴⁵⁾。

(3) 堆肥利用と都市・農村の関係

次に、人糞尿施肥について若干述べ、今回の大会のテーマとひきつけて論じたい。

筆者は、天文年間頃、16世紀前半頃になって、戦国期城下町成立と同時期に、各地方都市において、都市と農村という関係が地域の中で確実に成立したとした⁴⁶⁾。それ以前の便所使用は、大都市、例えば中世京都や鎌倉では存

在したし⁴⁷⁾、第2次集村の時期にもある程度、広がっていたと考えられる。

しかしながら、I-b類の成立つまり戦国期城下町が普遍的に成立する16世紀前半頃になって、確実に広範囲に地方都市の人糞尿を、農村の農作物栽培の肥料として本格的に広く利用するようになると思う。

従来の歴史学界における大多数の意見は、南北朝時代から人糞尿の肥料が広く利用されていたとして、そのための肥壺として陶器甕がたくさん生産され流通したというものだが⁴⁸⁾、考古学において、未だ農村において、便所遺構と想定される埋甕遺構は見つかっていない。室町時代に成立した『泣不動縁起絵巻』に見られる畠の一角に陶器製埋め甕があるという光景が人糞尿利用の例としてよく引用される。しかし、黒田日出男の指摘するように、染色の工程の一つともとれ、そうすれば埋め甕が藍甕となるわけであり、根拠が崩れる⁴⁹⁾。

V. 結 語—戦国期城下町二元論の再評価

最後に、西国の城下町を分析した小島道裕の言う戦国期城下町二元論⁵⁰⁾の再評価を、本稿の類型論、特に短冊形地割の型式分類論の立場から行い結語としたい。まず、戦国期城下町二元論についてである。第一点目は、二元論の実態であるが、本稿による類型で言えば、一乗谷型短冊形地割を居館化という方向性における階層性の末端としてもつI-b類と、戦国期に多くがIII-b類となり得なかった市町つまり草戸型短冊形地割を集落の基本とするIII-a類との二つの類型が一元化したものが近世城下町という論となり、本稿の試案からは整合的に理解しやすい。つまり、本稿では城下町の祖形をI-a類における居館周辺の空間構造の中に見ることになる。換言すれば、I-b類は、I-a類である近江国甲賀郡山中氏屋敷図や伊香郡小山家の屋敷構えの外部に一乗谷型短冊形地割を加えたようなありかたを示しており、I-a類は吉田伸之の指摘するよう

に、城下町の原型ということが可能である⁵¹⁾。

本報告では、戦国期城下町の都市性の基本となる一乗谷型短冊形地割の出現の歴史的方向性を居館化(I類)の中に見出し、14世紀末から15世紀前半における方形館体制の成立に示される室町幕府守護体制の成立と関連させて考えた。つまり、その政治権力によるヒエラルヒッシュな社会再編の結果、階層分化が生じて出現したと考えた。

そして最後に近世化であるが、一乗谷型短冊形地割と草戸型短冊形地割が再編一元化されて、両側町型式の町割が成立しさらにそれが面的に形成され長方形街区が出現する⁵²⁾。I-b類の居館及び屋敷地の周辺にこの両側町を基本にした長方形街区が新たに設定されて近世城下町が成立すると理解する。

本稿は、「時の断面」⁵³⁾における景観復元という主たる課題に一定の成果を挙げてきた歴史地理学が、城下町分析の際に最も多用してきた短冊形地割を取り上げ、考古学ではどのように理解できるのかを示した試論である。歴史地理学会会員の忌憚りの無いご批判をおおぎたい。(富山大人文学部)

〔付記〕

本稿は、1998年6月7日、歴史地理学会第41回大会において、口頭発表したものを基本として、当日時間の都合上割愛せざるをえなかった部分を加筆して、以前発表した以下の2論文に修正を加えたものである。①前川 要「中世環濠集落と惣構え—考古学から見た中世後期集落の類型と変遷—」『日本史研究』420号、1997、55～78頁。②前川 要「中世村落と都市—地域社会における集村化と都市の成立—」『考古学研究』第45巻第2号、178号、1998、41～60頁。当日の報告とは、構成や内容について一部異なるものであることをお断りしておくとともに、併せてご参照頂ければ幸いである。また、この研究は、平成9・10年度文部省科学研究費補助金奨励研究(A)「戦国期城下町成立期における都市空間構造の考古学的研究」(研究代表者：前川 要、課題番号：08710260)の成果の一部を含んでいる。なお、大会の質疑応答の際、参加

者のかたがたより、多くの有益なご教示を戴いた。以下に、記して感謝する次第である。

足利健亮、金坂清則、藤田裕嗣、溝口常俊(50音順、敬称略)

〔注〕

- 1) 松本豊寿『城下町の歴史地理学的研究』、吉川弘文館、1967、474頁。
- 2) 小林健太郎『戦国城下町の研究』、大明堂、1985、352頁。
- 3) 矢守一彦『都市プランの研究 変容系列と空間構成』大明堂、1970、249頁。
- 4) 小島道裕『戦国期城下町の構造』『日本史研究』257号、1984年、30～59頁。
- 5) 市村高男「中世後期における都市と権力—城下町の形成と民衆—」『歴史学研究』547号、1985、のち、『戦国期東国の都市と権力』思文閣、1994、562頁所収。
- 6) 吉田伸之「城下町の祖型」『城下町の原景 年報都市史研究』1、山川出版社、1993、37～47頁。
- 7) 前川 要「中世環濠集落と惣構え—考古学から見た中世後期集落の類型と変遷—」『日本史研究』420号、1997、55～78頁。
- 8) 広瀬和雄「中世村落の形成と展開—畿内を中心とした考古学的研究」『物質文化』50、1988、7～27頁。
- 9) 都市性という用語は、基本的には、板垣雄三『歴史の現在と地域学—現代中東への視角—』岩波書店、1992、409～421頁に準拠するが、ここでもあまり明瞭ではない。本稿では、都市的要素というような意味で使用しておく。
- 10) マルクス＝エンゲルス・真下信一訳『ドイツ・イデオロギー』国民文庫＝6 大月書店、1965、176頁。
- 11) ここで使用している「工村」という用語は、網野善彦が使用した言葉に示唆を受け(網野善彦『日本史再考 新しい歴史像の可能性 NHK人間大学』日本放送出版協会、85頁)、本稿で具体的なイメージを跡付けた。しかし、この概念は、ウエーバーも既に「オイコス」の「氏族成員がそれぞれの氏族に事実上世襲されているような工業経営を営みつつ形成しているような種類の定住—アジアやロシアの「工業村」(マックスウエーバー・世良晃志郎訳『都市の類型学』創文社、1964、4頁)という形で指摘してお

- り、決して「都市」とは認定していない。
- 12) マックスウェーバー著書、前掲11)。
 - 13) 広瀬論文、前掲8)。
 - 14) ①野洲町教育委員会『西田井遺跡現地説明会資料』1987。②木戸雅寿「水辺の集落の原風景」『湖の国の歴史を読む』新人物往来社、1992、140～174頁。③木戸雅寿「考古学からみた中近世集落の発展と都市・町の成立とその問題点」『中世都市研究 都市空間』1 新人物往来社、1994、173～188頁。
 - 15) ①鋤柄俊夫他『日置荘遺跡』大阪府教育委員会、財団法人大阪文化財センター、1997、586頁。②鋤柄俊夫「中世畿内の村落遺跡」『月刊文化財』398号、1996、47～55頁。③鋤柄俊夫「中世地域社会における村落の考古学的研究」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第8集、1997、87～108頁。
 - 16) ①笠井敏光・村田修三『古市遺跡群』VI羽曳野市教育委員会、1985、59～108頁。②笠井敏光「高屋城と古市」『ヒストリア』第113号、1986、1～16頁。
 - 17) 森格也・宮下睦夫『横江遺跡発掘調査報告書』II滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会、1990、286頁。
 - 18) 松本洋明・服部伊久男『十六面・薬王寺遺跡』奈良県橿原考古学研究所、1988、317頁。
 - 19) ①葛野泰樹・稲垣正宏『妙楽寺遺跡』III滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会、1989、197頁。②葛野泰樹「近江の中世村落について」『日本歴史』第509号、1990、97～108頁。
 - 20) ①續伸一郎「堺—中世の環濠都市」『中世都市鎌倉を掘る』日本エディタースクール出版部、1994、159～182頁。②續伸一郎「開かれた防衛都市 堺」『中世の風景を読む』5 新人物往来社、1995、78～113頁。③森村健一「中世・近世における国際貿易都市、堺の都市計画・拡大論—堺環濠都市遺跡にみる土地利用のありかた—」『シンポジウム掘り出された都市—資料集』江戸東京博物館、1996、13～17頁。
 - 21) 神岡町教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室『江馬氏城館跡』I・II・III、1995・1996・1997、各187・186・212頁。
 - 22) ①福井県教育委員会・福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館『特別史跡 一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告』I・II・III・IV・V、1976・1988・1991・1994・1995、各156・34・50・72・47頁。②岩田隆「戦国城下町越前一乗谷」『守護所から戦国城下へ—地方政治都市論の試み—』名著出版、1994、141～171頁。
 - 23) ①岩本正二・鈴木康之他『草戸千軒町遺跡発掘調査報告書V中世瀬戸内の集落遺跡』広島県草戸千軒町遺跡調査研究所、1997、490頁。②岩本正二「草戸千軒の発掘成果から」中世都市研究会編『津・泊・宿』新人物往来社、1996、38～55頁。
 - 24) 小野正敏「越前一乗谷における町屋について」『論集 日本原史』吉川弘文館、1985、805～831頁。
 - 25) 岩本論文、前掲23) ①。
 - 26) 高橋康夫『京都中世都市研究』思文閣、1983、495頁。
 - 27) 福島県郡山市教育委員会『荒井猫田遺跡現地説明会資料』1997。
 - 28) 下村公彦他『田村遺跡群 中～近世小結』『高知空港拡張整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』第10分冊、高知県教育委員会、1986、421～455頁。
 - 29) 高田 徹・内堀信雄「美濃における15・16世紀代の守護所の変遷」『守護所から戦国城下へ—地方政治都市論の試み—』名著出版、1994、109～140頁。
 - 30) 坂井秀弥「越後の道・町・村—中世から近世へ」『日本海交通の展開—中世の風景を読む』4、新人物往来社、1995、56～100頁。
 - 31) ①今谷 明『室町幕府解体過程の研究』岩波書店、1985、498頁。②今谷 明『守護領国支配機構の研究』法政大学出版局、1986、482頁。
 - 32) 前川 要「結語」『江馬氏城館跡—下館跡発掘調査報告書I—』神岡町教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室、1995、143～148頁。
 - 33) ①河野眞知郎他『今小路西遺跡発掘調査報告書』鎌倉市教育委員会、1990。②河野眞知郎「鎌倉の武家屋敷と都市住居—中世鎌倉市街地の都市様態—」『仏教芸術』第164号、1986、67～87頁。
 - 34) 神岡町教育委員会他、前掲21)。
 - 35) 前川論文、前掲7)。
 - 36) 前川 要「中世都市と十三湊—中世集落論の中での十三湊遺跡の位置付け—」『中世国際港湾都市十三湊と安藤氏』青森県郷土館展示図録、27～32頁。
 - 37) 前川 要「中世村落と都市—地域社会における

- 集村化と都市の成立一」『考古学研究』第45巻第2号, 178号, 1998, 41~60頁。
- 38) 今谷著書, 前掲31) ②。
- 39) 宮瀧交二他『堂山下遺跡』財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団, 1991, 128頁。
- 40) 伊藤毅「境内と町」『年報都市史研究一城下町の原景』1, 山川出版社, 1993, 23~36頁。
- 41) 田代隆他『自治医科大学周辺地区昭和58~63年度埋蔵文化財発掘調査概報』財団法人 栃木県文化振興財団, 1984~1989。
- 42) 阿部俊夫他「古宿遺跡」『母畑地区遺跡発掘調査報告25』福島県教育委員会・(財)福島県文化センター, 1988, 119~202頁。
- 43) 伊藤毅「「宿」の二類型」『都市と商人・芸民 中世から近代へ』山川出版社, 1993, 147~165頁。
- 44) 市村高男「中世東国における宿の風景」『中世の風景を読む』2, 新人物往来社, 1994, 74~121頁。
- 45) 飯村均は, 中世前期の集落を, 筆者の2類型に加えて, 板壁掘立柱建物を主体とする村落の類型の3類型に分類している。(飯村 均「遺跡のかたち 都市のかたち—中世前期の東国」『中世都市研究会 第6回研究集会発表要旨』中世都市研究会, 1998, 6~19頁。)
- 46) 前川 要「中世考古学におけるトイレ研究」『トイレ遺構の総合的研究—発掘された古代・中世トイレ遺構の検討—』奈良国立文化財研究所, 1998, 246~252頁。
- 47) 平安京八乘院町と推定される左京八条三坊では, 短冊形地割の裏地に汲み取り式便所遺構が検出されている(東 洋一・網 伸也・南 孝雄「平安京左京八条三坊(JR京都駅構内)の建造関係遺構」『日本考古学協会第62回総会研究発表要旨』日本考古学協会, 1996, 146~148頁)。また, 鎌倉においても, 13世紀半ばころ, 政所跡, 笹目遺跡, 長谷小路周辺遺跡などから, 汲み取り式便所と推定される遺構が検出されている(馬淵和雄「発掘されたトイレ遺構—鎌倉遺跡群」奈良国立文化財研究所報告書, 前掲46), 12~14頁)。
- 48) 保立道久『中世の愛と従属』平凡社, 1986をはじめとして, 南北朝期には既に人糞尿施肥の一般化が進行しているという意見が大勢を占めている。しかしながら, 近年急速に進歩しつつある, 寄生虫卵の分析手法によれば, 16世紀になってはじめて, 農作遺構から検出されるという(奈良国立文化財研究所報告書, 前掲46) 56頁の左段)。
- 49) 黒田日出男『姿としぐさの中世史』平凡社, 1986, 134頁。
- 50) 小島論文, 前掲4)。
- 51) 吉田論文, 前掲6)。また, これに関連して最近の研究として, 斎藤慎一の研究が興味深い(斎藤慎一「戦国期城下町成立の前提」『歴史評論』572号, 1997, 40~51頁)。斎藤は, 文献史料から, 15世紀半ばころに, 前代以来の本拠の空間に加えて要害も恒常的にもつようになり, 小島が想定するような二元的な空間は, 戦国期城下町成立以前より存在していたことを示している。
- 52) 前川 要『都市考古学の研究—中世から近世への展開—』柏書房, 1991, 263頁。
- 53) 藤岡謙二郎・矢守一彦・足利健亮『歴史の空間構造』大明堂, 1976, 4頁。